

青森県今別町奥平部・褰月・浜名の堂・庵行事調査報告

古川 実¹⁾

The Report on rituals at temples in Imabetsu(Okudairahe, Horozuki, Hamana), Aomori. pref.

KOGAWA Minoru

キーワード: ムラの堂・庵 本覚寺 お講

はじめに

筆者は本紀要第38号から第43号まで青森県下北地方の「テラ」、「テラこ」と呼ばれるムラの仏教的な施設において行われる行事などの調査報告をしてきた²⁾。今回は津軽半島北端に位置する今別町の津軽海峡沿岸のムラにおいて行われている堂・庵での仏教的な行事などを報告する。

筆者は青森県史編さん民俗部会の一員として2008年にこの地域を調査しており、今別町奥平部の地蔵堂で年輩の女性たちから聞き取りを行っている³⁾。その際、地蔵堂の管理方法やそこで行われる行事が下北地方のテラの管理や行事などに類似しているように感じていた。また、2018年の夏に今別町浜名で調査する機会があり、浜名の無住職の庵を浜名町会が町会の施設として管理し、また町会の行事として仏教的な行事を行っていることを知った⁴⁾。本調査報告は、これら2地域での調査内容に今年度再調査した内容を加え、さらに今別町褰月の海雲洞釈迦堂（以下、「釈迦堂」という。）における行事などの調査内容を記したものである。ムラが管理する仏教的な施設とその場で行われる行事などについて、下北地方と津軽半島北端地域とを比較する基礎的な作業としたい。

なお、今別町今別に所在する本覚寺（浄土宗）の寺院行事についても若干であるが報告する。本覚寺はこの地域の浄土宗の本寺であり、寺院の月例行事であるお講には各ムラが当番となって手伝うなどしている。檀那寺と檀家とのつながりの深さばかりではなく、各ムラでの仏教的な行事に本覚寺が密接に関わってきたものと考えられる。

1 今別町奥平部、褰月、浜名の概況

今別町の各集落は津軽海峡に面する海岸部と北流する今別川流域に点在し、町の中核部となる今別が今別川河口部に立地する。今別は藩政時代、蝦夷地への渡航や日本海廻りの海運で重要な港となり、津軽領九浦の一つに指定され町奉行が置かれた。今回の調査地は今別の東側の奥平部、褰月、そして今別の町場を西に過ぎたところの浜名であり、いずれも海岸部の集落である。

明治9(1876)年に編纂された「新撰陸奥国誌」には奥平部と褰月は一本木村の支村であり、奥平部は東の区域を綱不知、西の区域を元奥平部といい家数合わせて46軒、褰月は家数34軒。一本木村全体に水田がなく畑がわずかにあり漁と北海道への出稼ぎで生計を立てていると記されている。また、浜名は家数18軒、田が多く畑が少しあって農閑は三厩昆布の漁を主とすると記されている⁵⁾。

明治22(1889)年町村制施行により浜名は今別村に合併、昭和30(1955)年に今別村と一本木村が合併し現在の今別町となる。平成27年度国勢調査では奥平部の世帯数58、人口118人、褰月の世帯数37、人口63人、浜名の世帯数108、人口239人。今別は世帯数474、人口1,000人である⁶⁾。過疎化の進行、若年層の大幅な減少が町の大きな課題となっている。

2 奥平部、褰月、浜名の堂・庵

(1) 奥平部の地蔵堂

『今別町史』には奥平部の地蔵堂は慶応年間(1865-1868)に建立され、悪病の守り仏として部落一同が参詣すると記されている⁷⁾。間口3間に奥行き4間ぐらいの建物で流し、トイレ、物置部屋が付属する。広間の奥に祭壇を設けており、中央には地蔵像が2体祀られている。向かって左が女の地蔵だといひ赤っぽい金襴緞子の着物を着せ、右が男の地蔵だといひ、南無阿弥陀仏と墨書している石に紫色の着物を着せている。ほかに小さい地蔵像が何体か祀られているが、これらは個人が奉納した地蔵だといひ。祭壇の前に賽銭箱を置いている。祭壇の向かって左側には多聞天様と元祖様(法然上人)の掛け図をかけており、その前にも祭壇用の机が置かれている。祭壇の柱には「オンカカ カビソン マイソワカ 十ペン申ス 無阿弥陀仏〱〱 三ベン申ス」と記された紙と「南無深重誓願地蔵大菩薩」

1) 青森県立郷土館学芸課長(〒030-0802 青森市本町二丁目8の14)

と記した紙を貼っている。これは昔から貼ってあるが、記された文句を現在は唱えていないという。

約 10 年前の調査での聞き取りの概要は次のとおりである。

地蔵堂は、道路工事の関係などから何回か建て替えられ、そのたびに地蔵様も動かしたが、堂そのものは存続させてきた。堂の管理はパパたちで行っており、墓地の草刈りもしている。パパというのは、50 から 80 歳くらいのお婆さんで、70 から 80 歳の人が一番多く地蔵堂に集まっている。天気がよければ畑に出て猿の見張りなどをしているので、堂に集まる人は少ないが、思い思いに堂に集まっていて、いつも地蔵堂には誰かがいるようになっている。3 か月に 1 回、多聞天様（海の神様だという）の集まりがあり、パパを主にして 22 人くらいが集まって、拜んだ後に料理を作ったり持ち寄りの料理を食べたりして楽しむ。各戸から千円徴収し堂の運営経費に当て、残りのお金は月の 25 日には今別の本覚寺（浄土宗）に行くので、そのとき本覚寺に納める。堂には地蔵様や多聞天様のカケズ（掛け軸）、今は使わなくなったが膳椀も置いている。葬式道具は集会所にあるが、人が亡くなったとき屏風にかける南無阿弥陀仏のカケズを管理し貸している。大数珠も置いており、通夜、彼岸、多聞天様の日にパパが集まって数珠を回して念仏を唱える。

次に 2019 年の調査内容を記す。奥平部は平館（外ヶ浜町）側の綱不知と今別側の元奥平部に集落が分かれていて、行事は別々に行っている。地蔵堂は元奥平部の集まる場所になっている。元奥平部は東側をムラナカ、西側をヤチマチといい、地域区分で 2 班に分けて当番となり、交代で行事を行う。ムラナカは 6 軒、ヤチマチは 5、6 軒ある。

地蔵堂に集まるのは、春秋の彼岸の三が日、新暦 6 月 3 日と 12 月 3 日の多聞天様の日、また、11 月 20 日から 25 日の間の 1 日に元祖様の日といって集まる。多聞天様の日には無病、家内安全を願いお経を 10 分程度唱え大数珠を回す。彼岸と元祖様の日も同じことをする。お経が終わると集まった皆で昼飯を食べながら歓談し井戸端会議のようになる。おらずにジャガイモを煮て食べるなどする。また、12 月 31 日の年越しではベツトウといって、集まることができる女性 3、4 人が夜 7 時から朝の 7 時まで堂にいて初詣の人を待っている。正月には年輩の女性たちがお参りして集まる。

以前は堂に毎日誰かがいたが、人（家）もかつての半分になり、年輩者は歩けなくなって集まる人が少なくなった。ただ、今も冬の 12 月から 3 月ごろまでは畑仕事がないので何となく集まっていることもあるという。

2019 年 12 月 3 日の多聞天様の日の行事は次のとおりである。8:30 ごろから地蔵堂に当番が集まり始める。10:00 ごろからは当番以外の人も集まり始め、祭壇に供えるツイゼン（霊供膳）の用意をする。多聞天様と元祖様に膳をあげて、地蔵にはご飯をあげる。あとでそれを集まった皆で護符のようなものとしてごちそうになる。

お経を始めるのは 11:00 ごろからで、大数珠を輪にしてその中に賽銭を置き、お経とともに大数珠を皆で回す。ミモサと呼ぶ大きい珠のところでは各々額にミモサを掲げ拜む。お経は般若心経と多聞天にあげるお経で、10 年くらい前からカセットテープに本覚寺住職にあげてもらったお経を録音し、録音テープを流して行うようになった。地蔵堂には本覚寺から僧は来ないので年輩の人はホンジョウ（方丈）様の弟子のようにしてお経を憶えて唱えていたが、今は若い人ばかりになって憶えている人がいなくなったので、本覚寺にお願いしてテープに吹き込んでもらった。元祖様の日にもお経を唱えるのでテープの表に多聞天様のお経、裏に元祖様のお経が録音されている。

暖房や料理などの経費と本覚寺のお講の賽銭として、割って出し合いにして各家から年 1500 円を集め貯めている。奥平部には本覚寺の檀家が 14 軒あり、平館の聞法寺（法華宗）の檀家も数軒あるが、多聞天様の場合はムラの皆が行うものなので宗派関係なく各家から集めている。

現在、地蔵堂の世話はムラナカでは横岡さんが中心となって声がけている。本覚寺のお講の係を 15 年くらいやったことがあり、地蔵堂の世話もするようになった。今までやってきていることだから、後を継ぐためにやっているという。お供えや行事の進行などは 80 歳すぎの人が 4、5 人來ているので、その人から教えてもらいながら行っている。横岡さんは奥平部の民生委員をしていたことがあり、地蔵堂に保健士を呼んで体操をしたり健康状態をみてもらうこともした。地蔵堂の行事があれば、それごとに集まるように声をかけあったり、話し合うことも多くなるので、地蔵堂は高齢者の見守りにも良い場所になっているという。

今別の本覚寺では毎月 25 日にお講の行事があり、奥平部では 3 月 24、25 日に当番の人が手伝いをしに本覚寺に行く。料理 120 人分くらいも作るので前日から準備が必要である。お講ではフジモン（諷誦文）といって、先祖代々の亡くなった人の月命日を書いて読み上げてもらい供養する。ただ、高齢者だとバスに乗っても寺まで歩くことになり行けなくなっているという。

（2）襲月の釈迦堂

襲月集落の西側に滝ノ沢という小さい沢があり、後背の山が急傾斜であるため小さい滝となっている。その岸に釈迦堂が建てられている。間口 6 間半に奥行き 3 間ほどで急な階段を上がって玄関口があり、入って正面奥に祭壇を設けている。祭壇は二つに仕切られており、左側には厨子に入った観音菩薩と観音の石像を祀っていて、札所巡礼の奉納物などがあがっている。滝見観音といわれ津軽三十三観音の二十一番札所となっており朱印が用意されている。なお今別の本覚寺でもこの釈迦堂の朱印がもらえることになっており、観音の本尊は本覚寺にあるという。右側には中

中央に阿弥陀様、左に自然石の石塔に緞子の袈裟を付けた自然石を祀っていて、釈迦堂というのはこの石が釈迦の像だからだという。右端には三猿を彫った台に青面金剛が立つ石像。祭壇の手前には小さい地藏像が祀られている。真ん中の柱には総本山知恩院の名と法然上人を描いた掛け図がかけられている。彼岸では今かけている掛け図のほかに立派な掛け図を掛けるという。

昭和 55 (1980) 年に信徒が記した「婁月の海雲洞縁起」が部屋に貼られており、それによれば海雲洞は貞治年間(1362-1368) からあったが、津軽二代信牧公が凶作続きで大飢饉となり餓死するものが多く、田畑は荒れはてたことを心配し、再び耕作し力強く生きていくための喜びを与えようと津軽三十三観音霊場を定め、ここを第二十一番「婁月の海雲洞」とし、西国の土を入れ西国霊場遍路ができるようにした。本尊は滝見観音だが、その後堂が破れたのを見た上人が堂が建つまでと御像を衣に包んで持ち去ったと伝えている。昭和 47 (1972) 年 6 月 7 日御堂が新築され、本尊の代りに聖観音を安置しているという。なお、滝見観音を本覚寺に移したのは本覚寺住職五世貞伝上人とされている⁸⁾。

釈迦堂の建立とその管理運営などの経緯について、明治 40 (1907) 年に聞き取りによってまとめられた「婁月釈迦講記奉納」と題した小冊子があることが報告されている⁹⁾。記された内容の概要は次のとおりである。

観音像が今別の本覚寺の持仏となっていたため滝ノ下流より観音像に酷似した自然の石を拾い、仏像の代わりに釈迦如来として祀っていたが、明治 20 (1887) 年ごろ釈迦如来の木像を新たに制作し再び祀ることになった。明治元 (1868) 年まで釈迦堂は 6 尺 3 尺の小祠で参詣人はあったが講組織がなかった。そこで有志の婦人たちが先立ちとなり釈迦講の設立に努めた。この地は僻遠にして交通不便であり菩提寺まで 2 里半と遠いことから、毎月釈迦堂に参詣し会合してお互いの見聞を話して披露すれば知徳を磨くだけでなく、村風改善、国恩に報いると呼びかけた。明治 15 (1882) 年、堂を 4 間と 2 間半に改造し上に釈迦如来を安置し、下の大広間を集会所として毎月 3 回参詣し懇話会を開き婦人たちが集まった。子供たちも加わることがあり家族的親睦の会ともなった。成文の規約はないが年輩者の指導に従い活動し、宗教の違いによって講に入るのを拒むことはなく、他村の参加も拒まない。仏具一式、婚礼仏事の器具 50 人前を用意し、足りないところの不便を補った。運営資金はテングサ、フノリを年 1 回採ることを漁業組合から許可され年額 2 円ほどの収入をあてた。旧 1 月 15 日と盆に講員 1 人につき 3 銭を拠出し貯蓄。堂の修繕、器物の補填、寄付などに使われた。参集日は毎月陰暦朔日、15 日、28 日、春秋彼岸 7 日ずつ、陰暦 4 月 8 日。

現在も釈迦堂の管理運営は婁月の女性たちで行っており、春秋の彼岸、4 月 8 日の釈迦の誕生日と毎月の観音様の日に集まって参拝する。各行事の世話は婁月の各家を近い家ごとに 6 軒 (以前は 7 軒) の班にして回り番で当番を決めて行っている。集まる日には当番が掃除をし祭壇へのお供えをする。前は当番が炊き込みご飯や赤飯とおかずを重に入れて持ち寄り、それを皆で食べたが、今はジュースやお菓子の持ち寄りになっている。

観音様の日の集まりは、当番の都合の良い日に行っており「観音様の日だからお参り下さい」と月ごとに地区の放送で連絡した。しかし、参る人が少なくなったので去年話し合いをし、昔からせつかくあった行事なので続けようという話になり、集まる日を 8 日に定めるなどした。お釈迦様の日が 4 月 8 日だから 8 日にした。新しい取り決めを示した貼り紙から当番の日と当番の班を抜き出すと次のとおりである。なお、各家は普段からの家の呼び方や家の印で記している。

釈迦堂についての決定報告 平成 30 年 3 月 21 日付け

〈お参りについて〉

- ・お参りは 3 月～12 月の期間にする。1 月 2 月は雪が多いため休みとする。
- ・お彼岸 (3 月・9 月) は中日の 1 回だけのお参りとする。会費：300 円
- 3 月：当番は上 (かみ) 15 軒 (〇三～佐々木さんまで) お花は門徒真宗で購入
- 9 月：当番は下 (しも) 14 軒 (稲葉さん～ヤマタさんまで) お花は浄土宗で購入

〈お参り日時〉4 月～12 月 前日の放送はなくなります。

- ・日にち：毎月 8 日 (3 月・9 月除く) ・時間：当番は 8：30 集合 お参り開始：9：30
- ・お磨き：8 月と 12 月

〈4 月～12 月当番一覧〉6 軒ずつ順番に行う (3 月・9 月除く) 会費：500 円

当番表

- | | | | | | | | |
|---|--------|--------------------|------|-------------------|--------------------|----------------------|-----------------------|
| 1 | 4・8 月 | ヤマ〇 | ヤマホ | カネ吉 | 池田 | カネヅ | ヤマタ |
| 2 | 5・10 月 | 又丁 | ヤマ八 | カネ丁 | ヤマ吉 | 〇丁 | カネヤ |
| 3 | 6・11 月 | カネ上 ^{じょう} | ヤマ丁 | 〇イ | 〇テ | 〇キ | ヤマ久 |
| 4 | 7・12 月 | 〇吉 | 〇一 | ヤマカギー | ヤマ上 ^{じょう} | ヤマ ^{りょうご} イ | 〇又 |
| | お賽銭 | 上半期 | ヤマカギ | カネ中 ^{なか} | 下半期 | 〇三 | ツゲ中 ^{なか} カネヲ |

以前はお参りした後は、年輩者が集まって晩まで遊んでいた。嫁が家事をするようになると自然に姑はここに来るようになったが、今は嫁も仕事があるので姑が家事を続けることになり、集まれる人も少なくなったという。今は観音様の日にはいつも10人ぐらい集まっており、当番のほかは任意で集まる。

会費は本覚寺檀家の各戸から年500円を集め、男だけの家からも集める。女性の集まりに使うので男だけの家にお返しすることを考えているという。観音の日と彼岸であげられた賽銭は釈迦堂の管理に使い、ほかの賽銭は月ごとに浄土宗と門徒宗とに分け、浄土宗では本覚寺に納めたりしている。釈迦堂の管理について袈月町会からは経費をもらっておらず、むしろ神社の修繕に釈迦堂の女性の集まりから寄付するくらいであり、賽銭で管理・運営が賄えている。

2019年12月8日の観音様の日の行事の概要は次のとおりである。

8:30に当番が集合し準備を始める。袈月は本覚寺と今別の真宗寺院正行寺の檀家となっているが、宗派関係なく参拝し、来ると最初に賽銭を賽銭箱に入れカネを2回鳴らして拝む。9:30ごろに人が集まったようなのでロウソク、線香に火を点し開始。大数珠を収納棚から祭壇の正面手前に置く。全員で浄土宗と門徒宗のお経を唱える。次にお経とともに大数珠を皆で輪になって回す。数珠の大玉が来ると額のあたりまで掲げて拝む。マゴバアサン（話者の姑にあたる）はお経の教本を見ないで唱えていたが、20年くらい前からお経を憶えている人がいなくなって、本覚寺、正行寺両方のお経を住職に唱えてもらいカセットテープに録音し流している。最初の本覚寺のお経で般若心経から始まる。次に門徒宗のお経を流す。10:00前に終了。祭壇に供えた持ち寄りの果物、菓子を祭壇の前に莫藎を敷き、そこに集めて参拝した人が等分して持って帰る。

この日は12月なので終わった後、皆で正月の準備のためミガキをした。祭具を磨いたり、巡礼の奉納物を下げたりする。奉納物は1月14日に行われる今別八幡宮のドンドン焼きで焼却する。

彼岸の中日には本覚寺から僧が来る。団子などのあげものが増えるなどするので、人数を増やすため袈月をカミとシモに分けた当番で堂の世話をしている。以前は彼岸の入りから終わりまで堂に集まった。4月8日は釈迦の誕生日で季節の花を供える。

(3) 浜名の無量庵

浜名では8割が門徒宗で今別の正行寺檀家である。墓は正行寺境内の墓地にある。あとの2割が浄土宗で浜名の無量庵境内に墓がある。無量庵（以下、テラと記す。）は今別の本覚寺の末寺で『今別町史』によれば貞享4（1687）年建立された¹⁰⁾。住職がいたときは彼岸などに各家を回っていたが、跡継ぎがいなくて50年くらい前から無住職のままである。人口も少なくなり経営が成り立たないことも無住職のままになっている原因だろうという。無住職の寺は今別町の他のムラにもありテラ、テラと呼んでいる。

テラは昔は本堂と庫裡があり今よりも大きな建物であったが、火災にあい平成20年に焼け残った建物を修復して現在のようになっている。玄関から入ると20畳ほどの部屋があり、正面奥が祭壇で真ん中に本尊の阿弥陀様、その両脇に厨子に入った法然上人像、善導上人像が祀られている。この像を地蔵様と受けとめている人もいて「泣いて笑って浜名のジンジョ（地蔵）こ」と呼ばれた有名な地蔵ではないかとされるが確かめられないという。玄関に入ってすぐの右側に個人で奉納した化粧をした小さい地蔵像や十王像も祀られている。

昔は葬式が終わるとガンドモ（棺を運ぶ御輿）に棺桶を乗せ、テラの前で引導を渡してから、オンボ焼くと言って、棺桶を背負ってテラの山側の線路を越えたところにあったランバ（火葬場）に運び死体を焼いた。

テラには5、6年前から老人クラブの女子部を中心に集まっている。男もいるが集まるのは3人ぐらいである。始めは週2回火曜日と土曜日に集まっていたが、去年から週1回土曜日に集まることになり、農作業が暇になる冬はよく集まっている。無住職になってからは暖房など管理経費がかかるので浜名町会でテラを管理している。もとはテラに毎日集まっていた。宗派に関係なく姑のバサマど（婆様たち）が嫁が強くなると、テラに集まるようになった。おしゃべりやトランプなど好きなことをし、お昼の弁当を各自持ってきて、イモを煮ておかずにしたり、料理を持ち寄ったりした。今ではやらないが、バサマどが中心になり百万遍だといって大数珠を持って地区を回ったり、テラで大数珠を回したりもした。これも宗派関係なく行った。大数珠は箱に入れテラに保管している。

今別の本寺の行事に合わせてテラにお参りすることは、正月に祭壇にお供え餅を上げるほかにはない。ただ、浄土宗のジュウヤ（十夜法要）は、前は檀家だけで行っていたが、宗派だけでは人が少なくなってできなくなり、現在は浜名の行事として行っている。11月23日の勤労感謝の日に、本覚寺から僧を呼び先祖供養のお経をしてもらう。そのとき賽銭を撒く。糯米で豆まんま（豆ご飯）や赤飯を作り仏様にあげる。ジュウヤのお供えは団子が位が高いといい団子を多くあげ、集まった人に分けて食べてもらう。また、大数珠を回す。浄土宗の家では墓にも団子を上げ、墓前で僧にお経をあげてもらう。

2019年11月23日のジュウヤについて概要を記す。

テラの世話は前年まで町会長を務めた新井田さんが中心となって行っており、やれる人がなく新井田さんが本覚寺の役員をしていたこともあり続けている。ジュウヤはテラが焼け再建した1年後には再開したという。

10:00から浄土宗檀家が無量庵にある墓に墓参する。本覚寺から僧を派遣してもらう。墓にはお菓子、飲み物などを家の人があげ、団子3個ずつジュウヤの世話をする人があげる。和尚が各墓を回り経をあげる。家の人は線香をあげ読経してもらい拝む。終わると僧に布施をする。

テラの祭壇にも団子を供える。数は決まっていないが、お供えるものの中では団子がえらいので、右側に供えるものとされている。左に餅、その手前に霊供膳を供える。浄土宗の浜名の檀家では亡くなった人がいると掛け軸を借りて来て下げるが、その掛け軸を祭壇の柱にかけており、そこにも祭壇を拵えて団子を供える。テラの向かいが集会所でそこで女の人が料理の準備をする。行事が終わったあとに集会所に移り、トキとってちょっとした宴会をするので、その準備である。団子はテラの台所では当番を作る。

祭壇や十王像や地蔵を祀っているところのロウソクに火を点し、11:00からジュウヤの行事が始まる。僧が入って来て祭壇の前に来ると参拝者は賽銭を前方に投げる。10円玉が多い。賽銭は新井田氏が集めてお盆にのせ祭壇の前の机におく。僧が舍利札文、十夜法要などを読経し、その後焼香箱を参拝者に回す。焼香箱が来ると参拝者は2回拝んで焼香し次の人に渡す。読経が終わると皆で念仏の唱和をする。次に御詠歌を唱える。次に僧が鉦鼓を打つ中で大数珠を回す。数珠の大玉がくると拝礼する。この後、諷誦文が僧により読み上げられる。先祖の読み上げをするが、その名簿は新井田さんが作成している。自分の先祖の名が読まれると参拝者は賽銭を祭壇前の方に投げる。

浄土宗ではお講といって毎月25日に本覚寺に参っている。その日は先祖へのあげ経を千円で申し込む。そうすると「〇〇(申し込んだ人の名前)のショウレイ」と僧が読み上げ、そのときホトケ1人に300円分くらいの硬貨を賽銭として祭壇の方に投げる。

3 今別の本覚寺

今別の本覚寺について「新撰陸奥国誌」では「岩城国山崎村専称寺の末寺浄土宗なり 始覚山と号す 寛文元年甲子三月四日安長と云ふ僧の開基なり」と記され、また、三厩湾の昆布漁を生業とすることに尽くしたとして現在も語られることがある貞伝上人について「五世中興開山を貞伝と称す…享保三年戊戌年六月旧里に帰り当山に住持す 時年二十九 同十六年辛亥四月十日死年四十二 人と成り温良恭謙にして慈仁の心尤深く 念仏往生の一法を以て分に随て普く衆生に説し 殊にはまの当たり辺疆の人民を化し 自行它化怠りなかりしかは 貴賤心を傾て帰敬し遠近踵を継て来詣し 家に鉦鼓を鳴し戸々仏号を唱るに至る」と記されている¹¹⁾。

本覚寺は安長上人が開基したことから、安長上人が属した奥州浄土宗触頭の専称寺(福島県いわき市)の末寺となり現在に至っている。本覚寺を檀那寺とする地域は今別町、旧三厩村(外ヶ浜町)に渡っており、後述するお講参拝者の所在地を考えると本覚寺信仰圏といえるものはかなり広いものと考えられる。また、中興と称される貞伝上人の事績や伝説は津軽地方の各地に分布していることも考えると、津軽地方の浄土宗派の宗教的な活動の上で本覚寺が果たしている役割は大きいものと思われる。調査地への本覚寺の宗教的な影響は「殊にはまの当たり」の人民が遠くからも参詣し、「戸々仏号を唱えるに至る」という様子や、堂・庵の由緒として本覚寺や貞伝上人とのつながりを述べるものであったり、現在行われているお講当番を各ムラが分担したりしているところに現れているように考える。ここでは本覚寺住職工藤氏から御教示いただいた本覚寺の寺院行事の概要を記す。

本覚寺ではお講を12月を除いて毎月25日に行っている。今別町、旧三厩村の各ムラに当番を割り当てており、各ムラから手伝いが来ている。12月15日としており、25日はクリスマスの日で各家庭のことを考え日を変えた。お講の当番は次のとおり。

(3月) 綱不知 奥平部 砂ヶ森 袈月 (4月) 三厩 増川 (5月) 六条間 藤島 四枚橋 釜野沢
(6月) 元宇鉄 上宇鉄 鑄泊 鳴神 椋榔 鎧島 竜飛 (7月) 二股 鍋田 関口 (8月) 大川平
(9月) 大泊 山崎 (10月) 村元 浜名 (11月) 八幡町 (12月) 西田 (1月) 寺町 新町 逗子
(2月) 後町 団地

当番はムラの戸数が少ないところは数ムラ組み合わせたり、多い所は参拝者への世話が多い月に当てるなど、平成になって当番の順を直した。ムラでは当番の家を決めていて、多くはその家の主婦が来る。若くても主婦が来ている。

2019年10月25日に行われたお講の概要は次のとおりである。庫裡では講が終わってから参拝者に出す料理などを当番が準備している。寺役員が黒の背広で参拝者の対応をする。参拝者には吉水流御詠歌の人や一般の人であるが、男性よりも女性の年輩者が多い。

10:00から開始。その前に役員が祭壇のロウソクに火を点す。やがて参拝者が寺で準備し各人に持たせた木魚を一斉に叩く。リンを鳴らして住職ほか4人の僧が本堂に登場する。本陣に入ると僧が通りすぎるときに僧に賽銭を投げる参拝者もいる。僧の着座後、御詠歌を住職が先に詠じ、それに従って参拝者が詠じる。終わりに南無阿弥陀仏を

復唱。次に僧による読経と御詠歌が繰り返される。途中で本堂の照明が消灯され南無阿弥陀仏を住職に従って復唱。

次に諷誦文が読み上げられる。僧が一斉に回向依頼者の先祖を読み上げ、読み上げられた者は僧がいる方に向けて賽銭を投げる。役員が賽銭を集め賽銭箱のところに置く。住職の説教の後に照明が点灯され 11:00 ごろに講が終了する。

お講には昔は 200 人くらい集まったが、現在は少なくなっているという。諷誦文は先祖の回向としてあげるもので、これが始まると参拝者は自家の先祖が読み上げられるのに聞き耳を立て、読み上げがあると賽銭を祭壇の方に投げる。僧の奥襟のあたりをめがけて投げる人もあったという。昔は大変なものであまり投げられるため本堂内陣に結界がない建物だったので、内陣の回りに金網を立てていたという。

以前はお講の日にいつも大数珠を回していた。お講で数珠回しをやって終わると仏への回向となるので、数珠回しに入れない人が出ないようにするため、木魚を打つようにした。それで 140 個も木魚を用意している。現在も寺では通夜で数珠を回すことがあるが、10 年前くらいから年輩者のために椅子席を用意した。そうすると数珠を回す場所がなくなったことも、数珠回しを止めた一因である。

吉水流の御詠歌の指導は戦後に本覚寺で始めたものだが、25 番まであり全部唱えると 40 分以上かかるという。昔からの旧節で唱えており、言葉の乗せ方や調子がほかと異なるところがあるという。上手な人が先導して唱えている。

本覚寺の年間の恒例行事には、1 月 15 日の施餓鬼会、4 月 10 日の御忌会、8 月 15 日の施餓鬼会、11 月 15 日の十夜会がある。また、春秋の彼岸の期間は百万遍で人が大勢集まる。

浄土宗の十夜や真宗の御取越は各ムラの行事になっていたが、平成 10 年代ごろからやる人が少なくなって、行事を止めたところが出てきた。堂・庵があるムラは祭壇があるのでそこで行事をしているが、公民館で行っていたムラではしなくなったという。

《注》

- 2) 古川実「青森県佐井村福浦のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第 38 号』2014)「青森県東通村大和・尻労のテラ行事と念仏行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第 39 号』2015)「青森県東通村入口・むつ市大畑町小目名のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第 40 号』2016)「青森県むつ市川内町桜川・宿野部のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第 41 号』2017)「青森県風間浦村桑畑・むつ市大畑町関根橋のテラ行事調査報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第 42 号』2018)「青森県佐井村磯谷のテラ行事報告」(『青森県立郷土館研究紀要 第 43 号』2019)
- 3) 調査内容は『青森県史叢書 平成 21 年度 西浜と外ヶ浜の民俗』に掲載。
- 4) 調査内容は『昔風と當世風』第 104 号に掲載。
- 5) 青森県文化財保護協会『みちのく双書第十五集 新撰陸奥国誌第一巻』一本木村、今別村、浜名村
- 6) 人口統計ラボ平成 27 年度国勢調査 <https://toukei-labo.com/2015/?tdfk=02&city=02303>
- 7) 今別町『今別町史』1967
- 8) 前掲 7)
- 9) 前掲 3) 前掲 4) に小冊子の内容が報告されている。
- 10) 前掲 7)
- 11) 前掲 5)

(引用・参考文献)

- 青森県史編さん室『青森県史叢書 平成 21 年度 西浜と外ヶ浜の民俗』2010
 青森県文化財保護協会『みちのく双書第十五集 新撰陸奥国誌第一巻』1964
 今別町『今別町史』1967
 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 2 青森県』1991
 古々路の会『昔風と當世風 第 104 号』2019



奥平部の地藏堂



多聞天様の日（奥平部）



婁月の釈迦堂



ジュウヤの供物（浜名）



浜名の無量庵



今別の本覚寺

